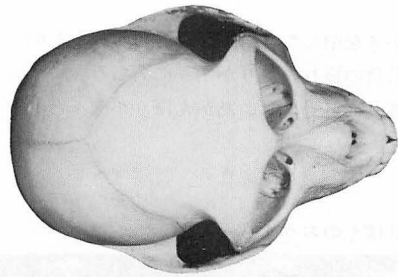
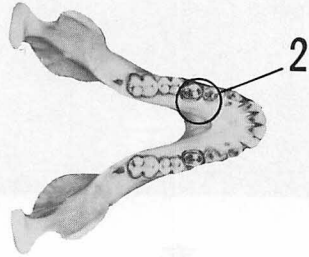
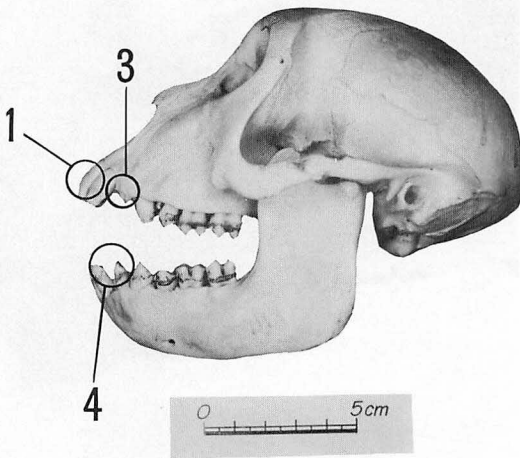


石川県白山自然保護センター編集

# はくさん

第6巻 第4号

## 特集 蛇谷のニホンザル



ニホンザル (霊長目 オナガザル科) 歯式 =  $\frac{2 \cdot 1 \cdot 2 \cdot 3}{2 \cdot 1 \cdot 2 \cdot 3}$

世界に現存するおよそ 200 種くらいのサル類のうちで、もっとも高緯度に分布するのがニホンザルである。北限に生息するサルとして名高い。

歯式をみてお気づきでしょうか。この歯式はわたしたち人間の場合と同じであることを。第3切歯および第2、第3小臼歯が退化してしまっている。雑食性の傾向が強い食性に適応して、前歯部がかなり発達しており(1)、全体として顎骨の突出が強く犬面に似た形態になっている。オナガザル科にはヒヒのように犬歯が長大になる種もあるが、ニホンザルでは顕著に大きくなっていない。また、小臼歯が破砕性に適した臼型の歯へと発達してきたが、これはサル類の小臼歯の特徴で、臼歯化とよばれている(2)。

上顎の犬歯が抜けているが、乳歯が抜けて、永久歯が萌出しかけているのが見える(3)。下顎の犬歯はまだ乳歯のままである(4)。

(上あごの長さ：11.6cm，幅：8.4cm，高さ：7.0cm。4～5才，オス。)

(花井正光，写真：江口元章)

〈写真構成〉

# 白山のニホンザル

白山のニホンザル

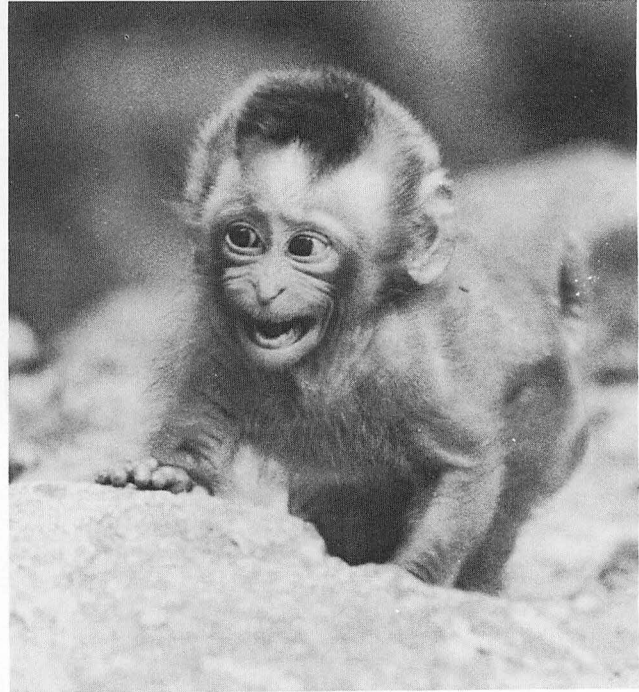
## “ぼく満<sup>ゼロ</sup>0才”

日本モンキーセンター 伊沢 紘 生



ぼく、きのううまれたんだ

ママ、こわい、はやくきて



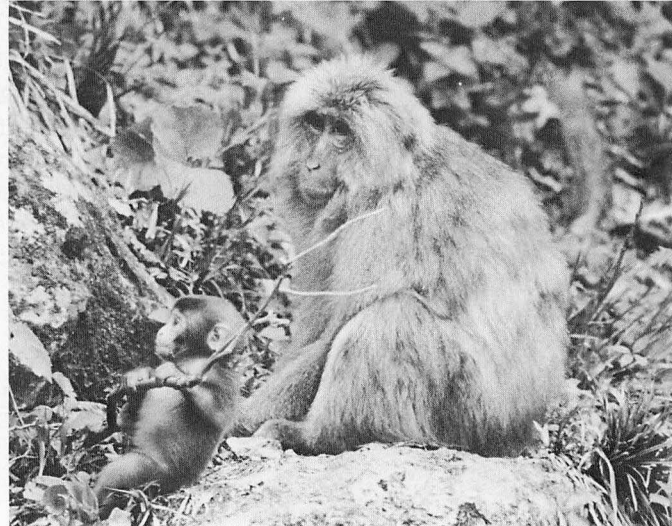
### 春

暖かさを増した日射しが南斜面の雪をとかし、若草の緑りの香りが山々に満ちる春、サルの群れに可愛らしいあかんぼうが次々と生まれる。

ママはぼくのおうまさん



けんすいのれんしゅう、いちにつ、いちにつ、ママじょうずだろう





レスリングごっこしようよ



ほくハンサム？そんなにみつめないで

## 夏

明るい陽光と草いきれの支配する夏、あかんぼうの成長は著しく、またたくましさをます。



おねえちゃん、だいじょうぶ？ほくをおとさないで



やっぱり、ママのせなかがいいや





おまえちよつとなまいきだぞ

## 秋

峰々や峡谷を華麗に色どる紅葉の秋は、サルたちにとって恋の季節であり、あかんぼうは母親から独立しはじめる。

おとなたちはなにをしているんだろう



ママはこのごろ、ぼくをちっともかまってくれない







ママさむいよう……



きのかわをかじるれんしゅうだい



きょうはゆきがいっぱいだから、  
ママのせなかにのろっと！

## 冬

白一色に塗りつぶされた世界，降り続く雪と厳しい寒さ，あかんぼうは，はじめての冬をけん命に耐え，そして満1才の春の訪れを待つ

ママのおなかはあったかいナ



きょうはほくのラッセルだ。みんなついてこい，えへん！



# 白山猿の思い出

糸田 敬仁

人生の流転夢幻の如し。私は、昭和20年8月、小牧航空隊基地より、やるせない傷心の身で、郷里に復員し、その後感ずることがあり、尾添川の源流を遡行、沢をつめ野宿を重ね、白山主峰や、北西面の連峰を極め、いわゆる修験者風の登拝を10年余りにわたり続行した。その間山中に於て、熊に襲われ逃げまどう時の恐怖心や、野宿の真夜中に地獄道に落ち、苦しく悶える悪夢、あるいは、幻惑にまどわされ、夜間に飛び起きるなど、実に危険な登山であったが、精神的には、行雲流水の自然を知り得たようでもあった。然し、また楽しい事もあった。後高溪谷の滝の淵に、多数の日本猿の群が、無心の姿で泳ぎまわり、遊びたわむる情景は、一幅の絵を見るが如く、私の脳裏に深くきざみ込まれ、生涯忘れる事の出来ない壮観であった。この様にした修験者風の登拝によって、私は信仰の道に生きるよう覚悟していたのに、風雪を耐え抜いた素晴らしい白山猿の魅力に取りつかれ、遂に猿気違いになってしまったのである。

昭和31年私の最も親しくしていた、金沢大学北辰寮山の会の会員達の協力によって、白山北西面の原生林に生息する野生動物の分布状況について、金沢営林署や日本モンキーセンターに資料と共に報告したことがある。この様な関係で学界に於ても、豪雪地帯に生息する白山猿の生態に注目される様に成った。当時の懐しい思い出について、少し述べて見よう。残雪の深い5月上旬のころ、笈ヶ岳の鎌尾根より、千丈平に下山、熊峠を経て水晶谷川を渡るべく、探索していたが、登山路が判明せず、万休の態であった。突然背後より激しく猿の声がして来た。私はとっさに雄谷のダムに飛び込むよう用意した。その時、前方の断崖より、大きい音がした。何事とダムをのぞくと、熊が水くぐりして泳ぎ、その後ろに子熊が二頭、これも水くぐりをして対岸の

方に泳いで行くのを望見した。敵は、本能寺にあり。私は岩かげに息をこらして潜んでいた。間もなく多数の猿たちも引き揚げて行ったので、安吐の胸を、なで下した事があった。また、岩間湯の谷の出会いや、角兵衛谷周辺に遊牧する群は、一番人になつぎ、よく岩間温泉坪田飯場を攻撃し、飯場の大鍋を持ち出す始末で、炊事の女人夫達にきらわれていた。私は、一策を案じた。それと言うのは、当時飯場は、トタン屋根でふいてあったので、猿の群が攻撃した時は、直ちに、屋根に上り棒でたたき様説明した。やがて、秋も深まる頃、猿の群が飯場を攻撃して来た。女人夫達は、兼て用意してあった棒を持って、屋根にはい上がり、トタンを精一杯たたきと、さすがの大猿たちも途端に、群をなして一目散に逃げ出し、事なきを得た。まるで落語のような話である。私は、その後、この飯場では、特別待遇の扱いを受け面目をほどこしたことが、思いだされる。

昭和37年11月1日、白山国立公園に昇格した記念に、何百年の昔より風雪に耐え抜いた白山猿を一般の人達に公開すべく、カムリ山の群に餌付けを実施したのであるが、到底私一人では不可能な事と推察して、39年地元、吉野谷役場に、その必要性を説明し、その結果、蛇谷開発の一環として村営を以て行ない、中宮区の元猟師西村伴蔵氏を私の助勤者として頂くことになった。その後の試行錯誤で、あらゆる苦勞を共にし、遂に、昭和41年8月7日、3年振りに、現在のジライ谷餌場に定着し、目的を達したのである。その後七年余りにわたって、各種の行事を行い自然教育の憩いの場として、乏しい村財政のなかを、入場料も徴収せず、広く県民に公開し、感謝されていたのである。

昭和48年4月石川県自然保護センターの発足にともない、ジライ谷野猿公園を石川県

と吉野谷村とで協同管理し、今日に至っているが、最近では、消極的な運営をしている様である。この野猿公園は、餌付け以来、十数年経過しているが、公害も発生せず、野生の習性を持続し、かつ奇形児も出産せず、優秀な公園であるので、当初の目的通り、自然教

育の場として適用し、5月中や7月下旬8月いっぱい、最も出席率の良い、しかも滞留時間の長い期間を利用し、積極的に、教材用として運営し、石川県や吉野谷村の誇りとして、立派に活動してほしいものと願っている。

〈金沢市野町 自然公園指導員〉

## 蛇谷溪谷の野生ニホンザルの

## 生活と環境の変化

増井 憲一

これまで、蛇谷のニホンザルと言えば、新聞などでは、秘境に繰広げられる野生のけもの世界の代表のように扱われてきました。確かに、雪におおわれた蛇谷で冬を生き抜く彼らの姿は真剣で生き生きとしていて、神秘ささえ感じさせます。しかし、この谷でも、人間と自然との関係の変化が急速に進みつつあり、ニホンザルの野生の生活に重大な影響を与える事態が生じています。それらの問題も含めて、蛇谷におけるニホンザルの生息の現況を紹介したいと思います。

【野生の群れとの出会い：春から秋、群れは流域に散在する】 白山自然保護センターの上流のジライ谷には野猿公園が設けられていて、そこへ行けばたいがい「白山ザル」に会えるようになっていますが、人から餌などもらわない野生のサルはどこにいますか。5月の連休の頃に、中宮温泉から白山への登山道をたどると、温泉山から湯谷頭を巻いてシナノキ小屋に至る付近でサルの群れに出会うことがあります。注意深い登山者なら、登山道に散らかったブナやカエデ、コシアブラなどの若芽の食べ跡や、生々しいフンに気付くでしょう。まだ稜線の雪を踏んで歩く頃ですが、サルは木々の芽ぶきを追ってこのあたりまで来ているのです。夏になれば、ゴマ平付近まで利用するようです。中宮道に限らず、蛇谷を取り囲む稜線では、春から秋にかけて、サルの群れを見かけることがあります。

これらの季節には、群れは蛇谷流域の山々に散在していると思われます。サルが頻りに観察される地点や、地形などの様々の情報を総合することによってある程度群れの数や分布を推測することができますが、この方法によって、金沢の糸田さんは蛇谷流域の群れの数として6群を、京大霊長研の河合さんらは8群をあげています。

【行動域の季節変化：冬には谷ぞいに群れが集中する】 ところが、知られているようにこの地域は我国有数の豪雪地で、冬期の蛇谷でサルが生活できる場所は、谷ぞいのわずかな範囲に限られます。言いかえれば、無雪期にはとらえどころのなかった蛇谷流域の群れが、積雪期には発見しやすくなり、また追跡しやすくなります。もちろん、この時期の調査は、時には胸までのラッセルを強いられるなど楽ではありません。また、蛇谷のジライ谷出会いより上流は雪崩の巣となり、ほとんど足を踏み込むことは不可能で、調査範囲に限られます。だが、木々がすっかり葉を落とした白い斜面に群れをとらえれば、個体数や体の大きさを詳しく調べることができます。複数の群れをほとんど同時に確認できるチャンスもあります。こうした調査によって積雪期に尾添川、蛇谷川流域の中宮部落からジライ谷までの区間で確認された群れの数は5ないし6です。積雪期には、限られた範囲にいくつもの群れが集まってくるため、群れ



どうしが接近する機会も多く、モンキーセンターの伊沢さんらは群間関係の調査というテーマでとりこんでいますが、野生群どうしの間では、激しいがみ合いや、斗争は認められていません。

【猿口学、野生群の個体数は単調増加を示さない】 これまでに観察された蛇谷の野生群のサイズの最大は86~87頭で、最小は14~15頭です。冬期の蛇谷流域は、何頭くらいのサルを養うことができるのだろうか。毎年の増減はどうなっているのだろうかという問いに対しては表1がいくらか答えてくれるでしょう。個体数調査を目的とした調査が行なわれはじめた1972年から1975年の記録によれば、毎年観察される群れのサイズはかなりバラついていますが、カムリA群を除いた合計頭数は、170~200頭を示しています。

餌付されたジライ谷のカムリA群が、次第に個体数を増加させているのに対して、(表2母)野生群では、変動しつつも、全体としてはある水準を保っていると言えます。

次に構成をみると、1972年と1973年の資料では、全体の15%ほどをアカンボウが占めています。毎年これだけの新たな加入がありながら、全体として個体数増加が見られないことは、それに見合った消失を意味します。また、オトナの割合は、オスの方がメスの半分以下と偏っていますが、これは、ほとんどのオスが、コドモからオトナにかけての時期に生まれた群れを去ってゆくからです。

【寒さには強いが食料難がある】 冬の蛇谷のサルについて、誰もが心配するのが、寒さと食物でしょう。もともと暖地の動物であるサルが雪の中で冬を越すことについては生物学者も注目しています。

秋になるとサルの体毛はふさふさとした冬毛に換り、脂肪がついて丸々としてきます。志賀高原や下北半島のサルは、-20℃の寒さにも耐えています。蛇谷で-10℃を下ることは稀と思われますから、人が想像するほどに耐え難い寒さではないのでしょうか。

積雪期の困難はやはり食物にあると言えます。この地域のほとんどの植物は、冬には枯れるか、葉を落としてしまいます。常緑の低木や草本は雪に埋もれてしまいます。そこで、非常に目立つのがナダレ跡や急崖地での採食と、樹皮や冬芽の採食です。ナダレ跡の高茎草原の露出地には、多年性草本の冬芽や秋に落ちたブナの実などがあります。群れは、それらの採食地を、丹念に巡回します。

【外敵と雪崩】 積雪期には、サルにとって直接的危険もあります。冬の行動域は下流の部落にも近いので、野犬の群れに追いたられることもあります。雪面を横切る時に、アカンボウたちがイヌワシに襲われる場面にも出くわしたことがあります。

雪崩も油断できません。新雪の急斜面の移動には、非常に慎重です。先頭の1頭が足を踏み入れたと同時に、上方から雪玉がころげ落ちてきたため、全群が斜面の横断をあきら

めて引き返したことがあります。また、移動を決心した場合でも、先の1頭が渡り終えてから次の個体が足速やかに渡りはじめるといった知恵を見せません。しかし、ナダレ跡などで採食している時には、不用心な面もあっ

表1 蛇谷流域で観察されたニホンザルの集団のサイズ(1966~1975)

調査年度	1966~1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975
頭	71(タイコ)	59+	45+	74+	63	86~87	64
	20~30(カムリB)	29	20±	64+	40	45	51
	23(湯谷)	21+		39	33	36	46
	23(進中谷)	14+		31	32	19	39
数	20(丸石谷)						
	16(国見)						
	14~15(雄谷)						
出典	河合他(1970)	伊沢(1972)	増井・小倉(1972)	増井・小倉(1972)	伊沢(1973)	増井	伊沢・増井

表2 カムリA群の個体数記録

年月	A♂	周辺♂	A♀	コドモ	アカンボウ	メス、アコンボウ計	計	観 察 者	備 考
1964.							66 + 78	林 (1970) 糸田 (1967)	餌付により分裂。カムリA群形成される
1966. 2							46	糸田 (1967)	
1966. 2		7					44	林 (1970)	
1967. 4		7					55	林 (1970)	
1967. 6		7					48	林 (1970)	
1968. 3		6					42	林 (1970)	
1969. 6		9					(61) <sup>1)</sup>	林 (1970)	
1970. 2	4	7	19	16	11	53	57	伊沢 (1972)	
1970. 7	2		21	25	4	50	52	増井	
1971. 2	3		23	22	4	49	52	増井	
1972. 2	3	17	26	20	15	61	65	増井	
1972. 11	4		30	28	8	70	(87)	佐藤 (1973)	
1973. 2	4		24(Y3)	24	11	62	66	増井	(Y3)ワカモノ性不明3頭
?	(19) <sup>2)</sup>		30	32	17	79	(98)	佐藤 (1976)	
11	(23)		29	34	16	79	(95)	木村 (1974)	
12	(17)		28	33	16	77	(94)	木村 (1974)	
1974. 2	5		30	29	6	65	70	増井	
4	5		24	22	6	52	57	木村 (1974)	
5	6		25	19	7	51	57	木村 (1974)	
?	(16)		27	23	6	56	(79)	佐藤 (1976)	
1975. 3	3	2	23	30	6	61	64	増井	
1977. 3	3	2				68	72	増井	

1) 周辺オスを含む頭数 2) 集団内のオスと周辺オスとの区別が不明のため、合計を示した。

て、小規模の雪崩に巻き込まれるサルを時々見かけます。

【餌付とスーパー林道の開通で、失われつつある野性のくらし】 1978年2月の観察ではカムリA群の頭数は109頭でそのうちオトナノメスが38頭、アカンボウが24頭プラスαでした。その前年の秋の観察では、頭数111頭、メス35~38頭、アカンボウ25~26頭でしたから、冬期にもほとんど死亡がなかったことが考えられます。この構成と出産率でゆくとまたたく間に200頭になる可能性もあります。餌付をすると、個体数が増えることは、全国ほとんど全ての野猿公園が経験しています。そして、人慣れしたサルが旅館や田畑を荒らし、人に危害を与えるようになります。箱根では、そのようなサルを射殺したり捕獲したりするという問題が生じています。スーパー林道が開通し、餌付されたサルと人との接触の機会が急増したことは、これに拍車をかけるでしょう。

先にのべたように、オスは群れから出てゆきます。そしてあるものは他の群れに加わります。これを当てはめれば、餌付群は、周囲の群れに、人慣れし、人工の味を知ったオスザルを供給していることがわかるでしょう。

しかも、個体数増加によって、その供給数は年々増えてゆくのです。志賀高原では、そのようなオスザルの先導によって、ある野生の群れがそっくり、旅館街のゴミ捨場に餌付いてしまい、果ては道路端で観光客に餌をねだる「コジキザル」さえ出現しています。

尾添川、蛇谷川流域でも、同じ事態が起こらないとは言えません。一昨年完成した一里野のスキー場は、もともと、積雪期には野生のサルの領土でした。そして、サルの冬越しのためにはこの下流の谷ぞいの地域が特別に重要なのです。そこに旅館やスキー客からの餌が用意され、そしてカムリA群からのサルが加わった群れがいるとなれば条件は整っているのです。今、手をうたなければ蛇谷のサルがもはや野生の代名詞とはかけ離れた存在になってしまう日も近いでしょう。

冬季の泊り場、採食地、移動ルートなどの紹介や、野生の動物達とも共存できる地域振興策など、言い足りなかったこともあります。終わりに、地元の関係者の皆様や白山自然保護センターの協力で蛇谷溪谷の自然と野生がこれ以上破壊されぬよう心から願うものです。

〈京都大学理学部自然人類学教室〉

# 蛇谷のニホンザル野外博物館

花井正光

本号で紹介されている蛇谷のニホンザル、カムリA群をご覧になった方は多いことだろう。野猿公苑の観察舎があるジライ谷を訪れる人は多く、中宮温泉や自然保護センターに來た人達の人気になっている。野外で檻も柵もなしでニホンザルを目にすることのできる魅力は確かに大きい。野生の動物を目にすることは簡単でないし、人間に一番近縁のサルをつぶさに観察でき、自然を身近に感じることができるからであろう。

昨夏、自然保護センターで全国の野猿公苑から関係者が出席して、野猿公苑を考える会が開かれた。この会は初めてでなかったし、白山のジライ谷野猿公苑について予備知識を持つ参加者は多かった。にも拘らず、この公苑の運営について改めて関心を示す人が多かった。それは、この公苑がほかの多くの公苑で直面している多くの問題のうち、幾つかがうまく運営されていることによってらしい。

本号で糸田さんも書いてみえるように、ここでは当初から見世物本意でない野猿公苑づくりに、多くの関係者の理解と協力を得ることができた。その結果、入苑料をとることも、餌を売って誰れもがサルに餌をやれるようなこともせず今日に至っている。もともと豪雪地で、雪に覆れる半年近い間サルたちは人工餌をもらわずに過ごす。厳しい条件下での生活を自前でやらねばならないカムリA

群のサルたちが人間を頼りにしないのも当然かも知れない。山に自然の食べものが豊富な季節には、幾日も餌場に現れないことが、この群れが野生を失っていないことを物語っている。自然に支配される面がまだ大きい状態を保っているわけである。これこそが全国の件の多くの苑を羨ましがらせる最大の特徴であるに違いない。

以上は餌付け開始以降現在までの推移のなかでのジライ谷野猿公苑の話である。いつまでもこうであってほしいし、またなくてはならないだろう。そのために今、自然保護センターは何をどうなすべきであろうか。スーパー林道の開設はこれまでにない多くの人を蛇谷にもたらしした。人を恐れないサルが人との接触をより広げようとしている。他の餌付け群ほどではないにしても、餌付け後個体数が漸増し2倍ほどに達しているなど既に指摘され、具体的な対策を必要とする問題も多い。

多くの対策の基本となる考え方として、われわれは野外博物館としての管理運営をとろうとしている。単なる見世物提供ではなく、自然について学ぶための効果的な教材としてサルを位置づけたいのである。人間側への偏向から節度ある自然との接し方を考え、学ぶことが可能な野外博物館に、とっておきの観せる「もの」となるはずであるし、それができる野猿公苑は全国にそう多くはない。

〈研究普及課〉



スーパー林道に出たカムリA群のサル



ジライ谷野猿公苑 谷をはさんでサルを観察する



## <収蔵資料の紹介>

# 白山のニホンザルに関する文献および記録映画

尾添川流域に集中して分布するニホンザルについて、餌付け群のカムリA群を中心にこれまで取組まれてきた調査研究の結果と記録映画を紹介します。これらの資料を皆様に利用していただけるよう便宜を図るのも、自然保護センターの博物館活動の重要な一事業です。文献の閲覧、コピーサービスはもちろん、映画フィルムのご貸し出しなどどしどし御利用ください。これらの他、新聞やグラフ誌などで取材された記事も資料として蒐集しています。

### 文献リスト（著者、発表年、標題、掲載誌又は書名、発行者、掲載ページ）

- 林 勝治（1969）白山のニホンザル，冬の生活．モンキー，Vol. 13（5）：5—11  
 ———（1970）白山周辺におけるニホンザルの生態学的調査（II）．白山の自然，石川県，344—373  
 外 次（1970）サルとカモシカの出合．モンキー，Vol. 14（6）：16—17  
 糸田敬仁（1964）白山の野生ニホンザル．野猿，Vol. 20/21：41—45  
 ———（1970）サルとクマの争い．モンキー，Vol. 14（6）：15—16  
 ———（1970）白山ジライ谷自然動物園．モンキー，Vol. 14（6）：18—19  
 ———（1974）白山ザルの生態——冬の生活（1）——．はくさん，Vol. 2（2）：6  
 伊沢紘生（1970）ニホンザムの保護と野猿公園のあり方．野猿，No. 32：49—57  
 ———（1970）白山・蛇谷の野生ニホンザル．モンキー，Vol. 14（6）：7—13  
 ———（1972）白山蛇谷一円に生息する野生ニホンザルの生態学的調査．白山資源調査事業1971年度報告，石川県  
 ———（1973）銀世界に生きる野生ニホンザル・アニマ，Vol. 1（9）：5—25  
 ———（1973）雪山にサルを追う，あるオスザルの死．アニマ，Vol. 1（3）：21—27  
 ———（1977）ニホンザルの群間関係．形質・進化・霊長類，今西錦司博士古稀記念論文集（加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編）中央公論社，255—274  
 ———（1978）白山蛇谷一円に生息する野生ニホンザルの生態学的調査（2）．積雪期における群れの遊動と群間関係について．白自研報，Vol. 4：93—109  
 河合雅雄（1966）白山のけもの（1）．野猿，No. 24：8—11  
 ———（1966）白山のけもの（2）．野猿，No. 25：8—11  
 ———ほか（1970）白山周辺におけるニホンザルの生態学的調査，1．白山の自然，石川県，335—343  
 木村光伸（1973）白山のニホンザル，10年ぶりの豪雪は蛇谷のサルたちにどのような影響を与えたか．モンキー，Vol. 17（5）：6—9  
 真野哲三（1977）ニホンザルと自然，観察ノートとその指導の手引き（石川県白山の例）．自然から学ぶ（サルから何が学べるか）．昭和51年度文部省特定研究報告．財団法人日本モンキーセンター，犬山  
 増井憲一（1972）蛇谷周辺の野生ニホンザルの調査報告．白山資源調査事業1971年度報告，石川県  
 ———（1974）白山蛇谷積雪期のニホンザルの遊動の観察例，（ニホンザルの現況研究会編）．ニホンザルの現況，第2回研究報告集1973，47—53．京大霊長研，犬山  
 ———（1977）白山地域のニホンザルの分布と保護上の問題点．にはんざる，No. 3：80—87  
 水原繁二（1970）サルと私．モンキー，Vol. 14（6）：14—15  
 水野昭憲（1976）白山のけものとその保護．（四手井・川村編）追われるけものたち，築地書館，130—149  
 佐藤 俊（1973）カムリA群の報告．白山資源調査事業1972年度報告，60—65．石川県  
 ———（1976）母系集団におけるメールボンド，ニホンザル社会の再吟味．白自研報，Vol. 3：75—93  
 ———（1977）ニホンザルの生活様式——白山カムリA群における事例研究——．形質・進化・霊長類，今西錦司博士古稀記念論文集（加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編）．中央公論社，275—310  
 菅原和孝（1974）カムリA群のオスの個体間関係．白自研報，Vol. 1：104—108

### 記録映画リスト（題名に※が付された映画はセンターが収蔵している）

題 名	規 格	制 作 者	制作年.月
秘境シリーズ 白山のニホンザル	不明	毎日放送大阪	1969.2
山の生きものたち*	カラー 15分	日本シネセル	1970.1—2
Japan's Snow Monkey**	モノクロ 26分	Wolfgang Bayer	1971.2
ニホンザル豪雪と闘う*	カラー 26分	岩波映画社	1975.2
雪国のニホンザル*（白山・志賀高原・下北）	カラー 26分	岩波映画社	1975.2
夏山コザルの冒険*	カラー 26分	岩波映画社	1975.8
ニホンザルの世界****	カラー 80分	日本テレビ	1977.5—1978.1
白山のサル*	カラー 30分	NHK金沢	1978.1
ニホンザル*	カラー 15分	共同テレビ	1978.8—1979.1
白山の自然（仮題．制作中）	カラー 25分	北陸スタッフ	1979—1980

\*\* 日本モンキーセンター（愛知県犬山市）収蔵

\*\*\* ビデオカセットテープ，他は全て16mmフィルム

## たより

ジライ谷に設置された野猿公苑を訪れる人は多く、餌付けされているカムリA群は白山ザルとして広く県民に知られています。しかし、餌付けが開始された当初から、見せもの本意でなく自然を学ぶ教材として関係者が幾多の努力を払われて今日に至っている事実は余り多くの方々に知られてはいません。日本じゅうの野猿公苑から、今ジライ谷野猿公苑は注目されています。理由は、本号で執筆者らが述べているとおりです。今後も、大自然のもとで、より自然の姿を観察できる野猿公苑として運営してゆかねばならない責任を改めて痛感しています。今後とも県民各位の御理解をいただき、本来の自然学習ができる野外博物館の一環としての野猿公苑が維持管理できますよう御協力をお願いします。本特集号が企画できましたのは、餌付けに努力されてみえた糸田敬仁さんはじめ地元の方々、生態調査を長らく継続してみえた伊沢紘生さん、増井憲一さんたちのお蔭です。ここに銘記して感謝の意を表します。

かねてよりお知らせしてきました、白山の自然と人の暮らしをテーマとした、“白山の自然”および“白山麓の人と暮し”(いずれも仮題)の制作が始まりました。映画会社2社のスタッフとセンターのスタッフが一丸となって現地ロケと取組んでいます(写真)。完成は一年先になりますが、白山地域を総合的に理解いただく教材映画として、一日も早く皆様に御利用いただけるよう奮闘してまいりたいと思っております。乞御期待。

今冬は暖冬異変で、名うての豪雪地にも雪が少なく、その影響は功罪相いなかばといったところでしょうか。自然の力のやはり大なることを改めて思い知らされた人も多いことでしょう。本誌創刊後6年目を終えました。より多くの皆様に愛読していただけるよう来巻も努力を重ねてまいります。



自然保護センター企画・制作  
白山の自然(仮題)  
現地ロケ風景(蛇谷の自然保護センター周辺で)

## 目次

表紙解説	花井 正光	1
写真構成		
白山のニホンザル “ぼくは0才”	伊沢 紘生	2
白山猿の思い出	糸田 敬仁	6
蛇谷溪谷の野生ニホンザルの生活と環境の変化	増井 憲一	7
蛇谷のニホンザルと野外博物館	花井 正光	10
収蔵資料紹介 ニホンザルに関する文献と記録映画	研究普及課	11
たより		12

はくさん 第6巻 第4号

発行日 1979年3月20日  
発行所 石川県白山自然保護センター  
石川県吉野谷村市原  
印刷所 株式会社 橋本確文堂